

「楽しい」大学生活を振り返る

池田 雅子



奨励者紹介（いけだ・まさこ）

北星学園大学 社会福祉学部教授

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、
苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。

（ローマの信徒への手紙五章三節～四節）

私は北星学園大学文学部社会福祉学科を卒業し、その後三年間の研究生、そして東京都内の大学院で学び、修了と同時に母校に戻り、かれこれ三〇年近く母校である北星学園大学で教員として仕事をさせて頂いています。学生の期間も入れると四〇年近く北星におり驚くほどです。

今日は「楽しい大学生活を振り返る」というタイトルでお話しますが、その前に本学に入学した経緯からお話します。実は私にとって北星への入学は、究極の「不本意入学」でした。教員をしている親からの干渉を受けないように親と全く違う分野に進もうと思い、美術大学への進学を考えました。そのため高校時代は休み期間を利用し、美術大学進学予備校に通い、石膏デッサンや油絵の練習をしておりました。しかし親から、本州の美大を受験するのは良いが、その前日にある「北星の文学部社会福祉学科を受験しないか？受験票を取りよせるなど準備は全てするので、おまえば当日受験に行くだけでいい」と言われ、

仕方なく受験した次第です。きっと美術の才能が無いことを見抜いていたのでしょう。結局、一か所だけ受かった美術の短期大学を辞退し、北星に入学することになりました。

どう考えても酷い話です。全く学科の教育に関心もなく入学してしまい、一年生の五月頃までは、本来学びたかった分野ではないのにと文句を言いながら大学に通っていました。そのような動機付けの薄い自分が、大学生活を通して、今では北星マニアになってしまいました。その秘密はどこにあるのかを、今回のお話をきっかけに振り返ってみようと思います。

最初に出合ったのが、一年生の教養講読演習でした。せっかく入学したのだから、一番厳しそうな（勉強になりそうな）先生のゼミを選ぼうと思い、シラバスを読み先生の顔を見に行きました。その先生が卒業までお世話になる恩師の永田勝彦先生です。本当に威厳のある様子でした。実際にゼミが始まると、丸山眞男の『現代政治の思想と行動』という書物を一年かけて読み切るという内容でした。この本は大学生なら一度は読むべき本ですと言われ、六〇〇ページ近い本で、日本が戦争に至り、その責任はどこにあるのか、人々の意識を問う内容で、辞書を引かなければ全く意味が分からず、議論についていくのがやっとの状況でしたが、読み終えた時の達成感は大きいものでした。これが一つ目のきっかけです。

二つ目は、これも社会福祉学科の専門科目で「社会福祉原論」という授業がありました。必修科目だったと思います。もう亡くなりましたが松井二郎先生の科目で、一年間かけて代表的な社会福祉理論の内容を理解するというものです。先生は毎回プリントを用意され、社会福祉理論について、身振り手振りを交えながら、熱く講義されておりました。今でも身振り手振りが生き生きと思ひ出されます。そして課題レポートは、代表的な社会福祉理論の書籍を紹介され、その中から一冊選んで読み込み、理解したことをレポートにまとめるという内容でした。私は孝橋正一先生の本を選びました。今は教員としてレポート課題を出しますが、専門書を一冊読んで内容をまとめるという課題を出す勇氣はありません。当時の受講者は選んだ一冊読み終え、しかも昼休みの食堂で、私は岡村重夫の理論が好きだ、いや私は孝橋理論……だと、熱く議論していたことを思い出します。

その流れで、学科公開講座の時に、授業で習った同志社大学の嶋田啓一郎先生が来られました。その講演を食い入るように聞き、内外の哲学者や社会学者の名前が飛び交いながらも、社会福祉問題を捉える視点や実践に向けての熱い思いがほとばしるお話に感動しました。内容はもちろんですが、私たち学生のレベルに合わせて話をするというよりも、

全く考慮せず難しい話をされる。そのことから、嶋田先生は私たちに正面から向き合ってくれたことに驚きと感謝の思いがあふれました。その後書籍を手に入れ「福祉理論ゼミ」という自主ゼミを結成して、理論の本を読みました。

三つ目は、当時北星に大学院が無かったので、ゼミの先生の元で研究生として残り、学科の先生たちの研究チームに入れて頂く形で、卒論の学生の調査を少し手助けし、全国学会で発表する機会を与えて頂きました。研究生で残る際、その先生のされている住民の福祉意識研究が面白く、言葉はよくないですが、盗み取るまで卒業できないぞと思い、三年間研究生として指導を受けました。そこで学んだことは大きいのですが、先生の学生への向き合い方から様々なことを学びました。

何かができるからというのではなく、一人ひとりの学生の個性を見つけ、関心を持ち、声をかける。「困ったところも含めて、学生を丸ごと受け入れる姿勢」そこから沢山学びました。そのように先生から扱われると、どの学生も自分には価値があるのだという事を実感し、イキイキときます。そういう私も、こんなに困った所ばかりなのに良いところもあるのかと自信に繋がりました。

北星学園大学での学生生活を経て得たものは、一人ひとりの学生を大事にすることです。

さらに教育内容では、学生のレベルに合わせてというよりは、多少難しい内容や課題でもぶつけてくれること。そこから大きな影響を受けました。そして最終的に、自分の学校に対して「誇り」を持てたことです。東京の大学院で学んでいるとき、様々な有名大学の学生と会話をする機会があり、そこで「私は札幌にある北星学園大学の出身ですよ。素晴らしい教育をしている大学ですが知らないんですか？」と話しました。相手は偏差値を調べたりするのでしたが、全く基準が違っています。

話は戻りますが、究極の不本意入学の学生が、大学生活を送る中で、知らず知らずのうちに「北星マニア」になってしまった経過をお話しました。当時の私は特別熱心なわけではなく普通の学生でしたが、北星に対して同じように感じている友人がたくさんいます。現在は教員として学生を育てる側ですが、当時受けたような教育をできているかは疑問です。当時とは社会状況も変わり同じことはできません。できれば自分たちが受けた教育、大事にしていたことを引き継いでいきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。